

野田原遺跡発掘調査報告書

平成18年度県営農地保全事業上野田原地区H工区の農道整備
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2008. 3

宮崎県児湯農林振興局
川南町教育委員会

目 次

第1章 はじめに

1. はじめに	1
2. 調査の組織	1

第2章 調査の記録

1. 調査に至る経緯	2
2. 調査区の位置と環境	2
3. 調査の経過	5
4. 標準土層	7
5. 調査区の設定	7
6. 遺 構	11
7. 遺 物	11
8. ま と め	13
抄 録	22



第1章 はじめに

1. はじめに

川南町は、宮崎県のほぼ中央の海岸線に位置し、面積は90.26平方キロメートルである。川南町は、概ね名貫川以南から小丸川左岸の台地の縁辺以北を町域とする。

川南町の歴史的環境は、従来より国指定史跡川南古墳群や東平下周溝墓群、把言田遺跡の間仕切り住居に代表されるように、弥生時代から古墳時代にかけての遺跡の集積が著しい地域として知られていた。戦国時代末期では、高城の合戦の際の戦没者を敵味方の区別なく手厚く弔った宗麟原供養塔などが知られている。しかし、近年では、縄文時代早期～旧石器時代の古い時代の遺跡の集積も著しい地域として知られるようになり、東九州自動車道関連の発掘調査では、旧石器時代から近世まで、数多くの成果が得られ、開拓の町として知られる川南町の「開拓以前」が随分と明らかになってきた。

今回の調査は、平成18年度の県営農地保全事業上野田原地区H工区の農道整備にかかる埋蔵文化財の発掘調査として、宮崎県児湯農林振興局の委託金を得て行った野田原遺跡発掘調査の報告書である。

なお、諸般の事情により、本報告は概要の把握のみとなっている。

2. 調査の組織

調査主体

川南町教育委員会

教育長

佐藤 賢一郎

文化振興室室長

吉村 典道

文化振興室長補佐

篠原 忠雄

庶務担当

文化振興室 係長

島岡 武

調査担当

文化振興室 係長

島岡 武

発掘作業員

発掘作業員は、社団法人川南町シルバー人材センターに委託して、下記の各位の協力を得た。

大久保一臣 黒木五男 永友懿洋 平野 敦 渡部鉄夫

金丸愛子 熊本トヨ子 松浦徳江 以上8名（敬称略）

なお、廃土置き場及び仮設ハウス・トイレの設置については、杉尾製材所の御協力を得た。また、上水道の使用に関しては、調査区の北西で鶏舎を営む山下さんの御厚情を得た。ここに記して厚く感謝申し上げます。

第2章 調査の記録

1. 調査に至る経緯

平成18年12月27日(水)・28日(木)にかけて、宮崎県教育庁文化財課による埋蔵文化財確認調査が行われ、その結果、発掘調査の必要があるということが決定していた。その後協議が継続して行われており、平成19年4月12日付けで川南町に発掘調査の見積依頼があり、4月18日付けで回答を行う。4月24日付けで発掘調査に関する委託契約を締結し、同時に文書番号6005-671で文化財保護法第94条第1項の規定に基づく埋蔵文化財発掘の通知が提出された。発掘調査は、表土剥ぎを4月24日からはじめ、6月29日までに終了した。

2. 調査区の位置と環境

調査区の位置は、北緯32度12分03秒、東経131度29分54秒(JGD2000)で、標高は約90mである。

平田川の支流の篠原川が刻んだ谷底の低地との比高は15~6m程度であり、南側に対する眺望が良い。調査地は台地の尾根をやや下った緩斜面上に位置し、勾配が急に変わるライン(概ね14+30の杭)よりも南には遺構・遺物はあまりないものと思われた。現況は山林で雑木林であったが、農道整備のために伐採が行われていた。

野田原遺跡は、縄文時代から弥生時代にかけての散布地として知られていたが、あくまでも表面調査でのことであり、今回初めて本調査を行うこととなった。当初予想された遺構・遺物は、包含層に含まれる多量の縄文時代早期の遺物、集石遺構、連穴土壇、旧石器時代の石器であった。



第1図 調査区位置図 (1/50,000町図)



第2図 調査区位置図 (1/25,000町図)

3. 調査の経過

以下に調査の日経過を報告する。

- 4月24日 表土剥ぎを行う。木の根で表土が荒れていたため、どこまで表土なのかかわからず。小さな切株の除去に加えて浅く剥いだ状態で止めた。
- 5月7日 本格的な調査を始める。
- 5月8日 引き続き精査。
- 5月9日 北側の調査区で、アカホヤ上面で揃えて遺構・遺物の有無を確認する。
- 5月10日 5センチメートル位ずつ掘り下げながら、前日に引き続き精査。
- 5月11日 同様に精査。遺構検出状況撮影。北側調査区の東端において暗色を呈する落ち込み状のものを検出する。風倒木の痕跡か土壌か判断できないので、当面そのままにすることに。暗部の中心と思われる部分にブロック状のアカホヤが混在しているのは、風倒木の根が起こされて混入したものか、上層からの落ち込みと判断される（後日風倒木の落ち込みと判明）。
- 5月14日 南側調査区の精査を行う。傾斜が北側調査区よりも大きいので、あまり遺構・遺物はないものと思われる。
- 5月15日 南側調査区でアカホヤ上面で精査を行う。縄文期の剥片と思われる遺物が検出されたが、特段の遺構は見られなかった。
- 5月16日 調査地の地形傾斜その他の要因から、南側調査区の遺構遺物は北側調査区に比べて薄いものと判断し、見極めを先にするために南側調査区の掘り下げを行う。
- 5月17日 アカホヤを貫き、黒色土よりも下位で川南では縄文早期の遺構面及び包含層となる淡褐色ロームまで掘り下げる。遺構は見られない。
- 5月18日 南側調査区の遺構・遺物検出状況の写真撮影を行う。A Tが目視では判別できない状況で、淡褐色ロームの下位はイワオコシ混じりロームとなる。そのため、出土層位での遺物の時期の判断はできない状況で、縄文早期包含層と、縄文早期～時期不明（旧石器時代）程度にしか判別できなかった。縄文土器の小片と時期不明の剥片が少量含まれるものの、自然礫も多かった。遺物の取り上げを行う。
- 5月21日 南側調査区の土層断面図を作成する。詳細に検討してもA Tは明瞭ではなかった。
- 5月22日 南側調査区の調査を終了する。遺構が全く見られず、遺物もごく僅かであったため、南側調査区を放棄し、土置き場にする。北側調査区の掘り下げを行う。
- 5月23日 北側調査区内で少しずつ遺物が見られるようになる。
- 5月24日 縄文早期の包含層を慎重に掘り下げる。明瞭な淡褐色ローム層中ではないので、

経年移動しているものと考えられるが、大型の石皿等が検出されるようになってきた。

- 5月28日 縄文早期の掘り下げを続ける。黒色土がやや薄れて淡褐色ロームに移行する。
- 5月30日 調査区北西部のボヤケの判断が難しい。遺物はあるが、移動しているので明確な判断ができない。旧石器時代のものと思われる（後に連穴土壌と判明）。
- 5月31日 北側調査区北西の縄文早期の遺物を残したまま、ATまで掘り下げを行う。写真撮影を行う。詳細な時期は判断できないものの、旧石器時代の剥片数点と台石が検出された。後牟田遺跡その他の事例から、AT以前の可能性もあるが、確定できなかった。縄文時代早期の遺物が散乱しているように分布している調査区北西部分に見られるボヤケは、後に連穴土壌だと判明する。切株や攪乱が多く判断できなかった。
- 6月4日 調査区北西部の縄文時代早期の遺物を、一部を除いて取り上げを行い、連穴土壌（連穴土壌A）の状況を把握する。縄文早期の淡褐色ロームでは遺構部分の判断が難しいので、ATまで一気に下げ、明瞭な検出を行うことにした。当日の作業終了段階では、4つの炉穴が連穴した土壌が確認された。北西隅の遺物が比較的多い部分については、やや土が暗色を呈しているため、土壌内部の埋土だった可能性もある。
- 6月5日 連穴土壌の掘り上げを行う。予想通り、北西隅の暗色帯は連穴土壌の埋土であった。少なくとも3回炉穴が作り直されているが、調査区の壁で西端の状況はわからなかった。
- 6月6日 南に行くに従って明瞭ではなくなるが、AT上面で写真撮影を行う。
- 6月7日 連穴土壌周辺を地区割りして残し、他の部分をイワオコシ混じりロームまで掘り下げることとする。基本的にAT中での遺物は混入以外有り得ないので、遺物は全く検出されない。1日掛けて連穴土壌の詳細な平面図を取る。
- 6月8日 連穴土壌Aの南側を半裁し、断面の状況を見る。複雑な掘り込みはなかった。
- 6月12日 連穴土壌Aの最も長い炉穴を南北に断ち割る。北壁がほぼ以降の限界と一致する。断面の状況から、幾度となく使用されたために焼け土と埋め土が混じり合っている状況が確認された。作業穴と煙道、炉穴の区別も比較的明瞭であった。
- 6月14日 連穴土壌を掘り飛ばして、イワオコシ混じりのロームまで下げる。
- 6月17日 何とか完掘をしたので、写真を撮る。
- 6月18日 最終の完掘状況の写真を撮る。その後、西壁の連穴土壌を追いかけたが、近代の攪乱を受けており、判然としなかった。
- 6月19日以降、土層断面図等の記録を調査員のみで作成する。
- 7月18日付けで、埋蔵文化財発見届を宮崎県警察高鍋警察署に提出、19日付受理。
- 7月30日付け、埋蔵文化財の認定。

4. 標準土層

第1層＝表土

最も上位に位置する層位。黒ボク土を主体とする。表面近くは森林土である。

第2層＝アカホヤ

表土の下位に位置するが、旧来の斜面の土地利用により、アカホヤ上位が攪乱を受けている部分が見受けられた。

第3層＝黒色土

宮崎平野で一般的にアカホヤ直下に存在する層である。今回の調査区では、比較的軟らかく、ねじり鎌で削ると光沢を帯びる。縄文時代早期の包含層である。

第4層＝淡褐色ローム

縄文時代早期～草創期の包含層～遺構面を含む層である。今回の調査では、調査区が緩斜面上に位置し、小林軽石層やAT上位の白斑ロームが明瞭ではないため、ATの直上に位置する。

第5層＝AT

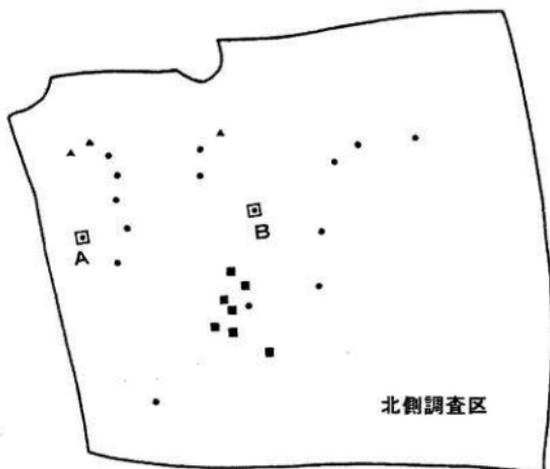
始良カルデラを給原とする降下火山灰である。北側調査区の北半分でしか明瞭には観察できない。

第6層＝淡褐色のローム層

高温石英を含む淡褐色のローム層である。霧島イワオコシと思われる橙色の火山灰が混じる。遺物は全く検出されない

5. 調査区の設定

今回の調査は、廃土置き場が全く準備されていなかったもので、杉尾製材所の協力を得て調査対象地区の北西の土地（川南町大字川南14,390-4）に仮設ハウスと仮設トイレ、廃土の一部を置かせていただいた。南に向かって傾斜している地形上、全ての廃土を当該地まで持ってくることは難しかったので、廃土の処理には難渋すると予想された。まず比較的平坦な位置に北側調査区を設定し、工事図面上のSP6杭付近で遺構・遺物があるかどうかを確定するために南側調査区を設定した。結果的には南側調査区の南半分では遺構・遺物はほとんど検出されなかったため、南側調査区よりも南に廃土を置くことを決定した。それでも樹脂製の水道管の敷設などがなされており、廃土の置き方にはかなり神経を使った

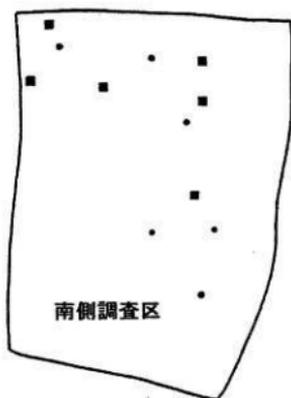


- = 縄文時代（早期以前）の遺物
- ▲ = 縄文時代（早期以前）の台石・石皿類
- = 後期旧石器時代の遺物

SP 6の座標
 X = -88554.7849
 Y = 46977.8640

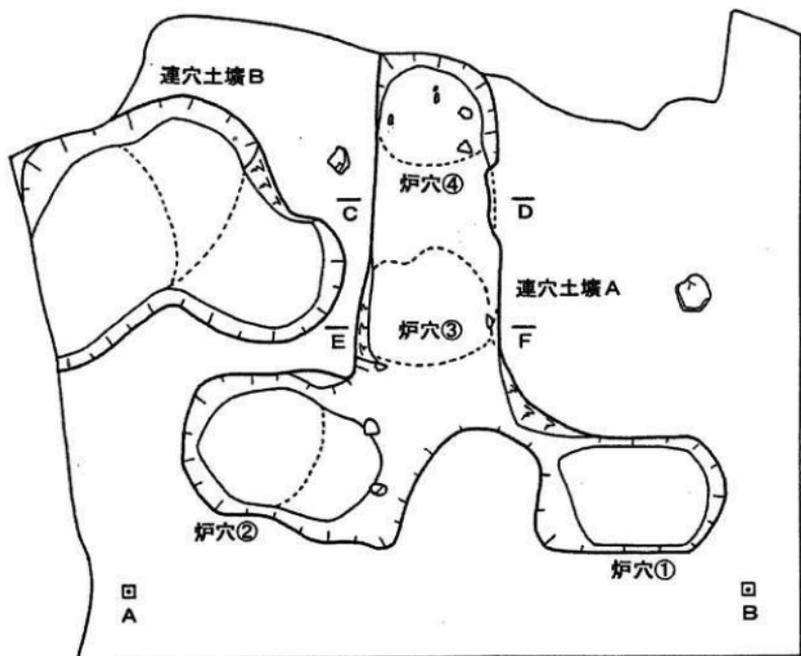
A 14+30の座標
 X = -88560.763
 Y = 46969.571

□ SP 6



□ A 14+30

第4図 遺物出土状況図



第5圖 遺構圖

6. 遺構

検出された遺構は、連穴土壌が2基だけである。北側調査区の北西で検出され、A T面で精査したので、全容が確認できているわけではない。連穴土壌周辺では、石皿・台石類が検出されているが、検出された面と連穴土壌を復元的に観察した場合の遺構面とにずれがあり、連穴土壌との関連は不明である。一般的な傾向として、縄文早期の検出面で遺物が集中した場合、遺物の除去を行うと、集石遺構が検出され、さらにその下部に連穴土壌が検出されることが多い。これは、連穴土壌や集石遺構を作る地形環境の選定基準がほぼ同一であったためと思われる。以下は、検出状況での説明である。

連穴土壌 A

最も長い煙道を持つ軸で3.40mを測り、直行する幅は3.52mある。炉穴①～③の前後関係はわからないが、炉穴③の後に炉穴④が作られており、石器類の投げ込みも行われていることから、炉穴④でこの連穴土壌は廃棄されたものと考えられる。

炉穴①は、長軸2.00m、短軸0.76mを測る。A T面からの掘り込みは0.23mを測る。底面に明瞭な焼土は見られなかった。

炉穴②は、長軸2.40m、短軸1.00mを測る。A T面からの掘り込みは0.30mを測る。底面には焼土が残る。

炉穴③は、長軸2.10m、短軸1.00mを測る。A T面からの掘り込みは0.30mを測る。底面には焼土が明瞭に残る。

炉穴④は、炉穴③を掘り進んで作られており、炉穴③の火床南端からの長さは2.10mを測る。焼土は明瞭で、投げ込みと思われる石器及び剥片も数点見受けられた。

連穴土壌 B

調査区の西端で切られていたため、一部が検出できず、全容は不明である。現に確認できた範囲では、3つの火床が確認できたが、前後関係は不明である。

検出状況で焼土が認められる面のレベルは連穴土壌Aよりも浅く、また、連穴土壌Aとも至近距離であることから、使用されていた時期は連穴土壌Aが古く、連穴土壌Bが新しいものと判断される。

7. 遺物

今回の調査区では、遺物の数は少なかった。遺物・遺構図については、包含層に含まれる単純な礫片等は除外した。検出状況は、第4図のとおりである。

① 旧石器時代の遺物

1 石核（残核）

南側調査区出土。縦4.0cm、横5.0cm、厚さ2.7cm、重量は55.0gを測る。石材は非常に硬質で斑紋のある流紋岩である。石材の産地は不明であるが、A T上位で川南周辺には普通にみられる石材である。周辺で母岩が同一と思われる剥片が2点検出されているが、接合関係にはない。

2 剥片

北側調査区出土。縦5.4cm、横3.1cm、厚さ1.1cm、重量は16.0gを測る。石材は硬質のホルンフェルス。背面は原礫の表皮である。腹面は、剥離方向の末端側で剥離が表皮側に廻り込み、エッジが鈍くなっている。

3 折断剥片

北側調査区出土。縦1.1cm、横1.1cm、厚さ1.1cm、重量9.4gを測る。石材は硬質のホルンフェルス。折断は、覆面側と背面側からそれぞれ行われている。

4 基部加工剥片

北側調査区出土。長軸5.5cm、短軸3.3cm、厚さ0.9cm、重量12.3gを測る。一部原礫の表皮を残す。石材は硬質のホルンフェルスである。基部に加工痕があるが、完成品かどうかは不明である。後牟田遺跡などでもよく見られる非常に硬い石材で、二次調整の必要がないほど鋭利である。

5 石核（残核）

北側調査区出土。縦3.6cm、横3.6cm、高さ3.6cm、重量49.4gを測る。一部に原礫の表皮が残る。石材は硬質のホルンフェルスである。

6 剥片類

北側調査区のほぼ同一地点から6点が検出された。重量は最も重いもので23.3g、最も軽いもので0.74gである。接合関係はない。周辺から出土した、類似する剥片類との接合関係もない。

7 敲石

北側調査区で出土。縦9.5cm、8.8cm、厚さ5.7cmを測る。重量は683.8gである。石材は尾鈴山酸性岩類である。硬質だが、多孔質で表面はもろい。敲打痕が良く残っている。

② 連穴土壌内の遺物

8 連穴土壌内鋸歯縁石器A

連穴土壌Aの炉穴④で検出された。縦6.5cm、横5.1cm、厚さ1.3cm、重量45.2gを測る。石材はホルンフェルスである。

9 連穴土壌内鋸歯縁石器B

連穴土壌Aの炉穴④で検出された。縦6.4cm、横9.8cm、厚さ3.8cm、重量は275.2gを測る。石材はホルンフェルスである。

2点とも連穴土壌内に廃棄されたものと考えられる。類似した形態のものは、南九州の縄文時代草創期～早期にかけて見られ、川南町内でも後牟田遺跡などで検出例がある。

8. ま と め

今回の調査では連穴土壌が2基と少量の遺物が確認されただけであった。調査の根拠となった遺物及び土壌状の落ち込みのうち、上墳状の落ち込みは、結果として風倒木の痕跡を誤認したものと判明した。しかし、確認調査では把握できなかった連穴土壌及び旧石器時代の剥片類が検出されたことの意義は大きい。

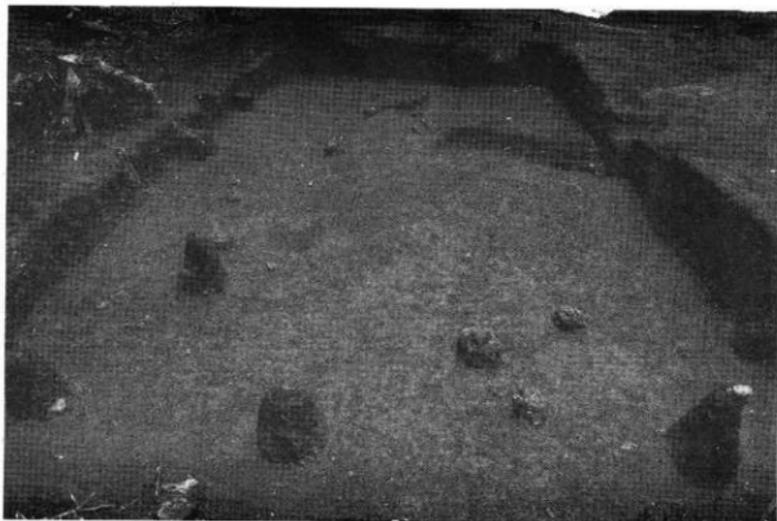
今回の調査での遺物の出土状況と地層の堆積状況から判断すると、事業地内で最も遺構・遺物の検出が期待できたのは、既に施工されていたBC6～No. 14の区間であったものと判断される。



調査着手前（北から）



調査着手前（南から）



南側調査区遺物出土状況（北から）

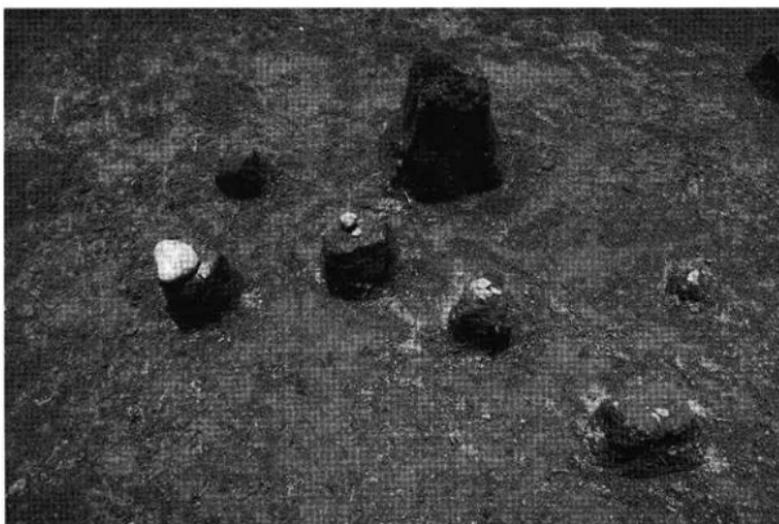


南側調査区遺物出土状況（南から）

図 版



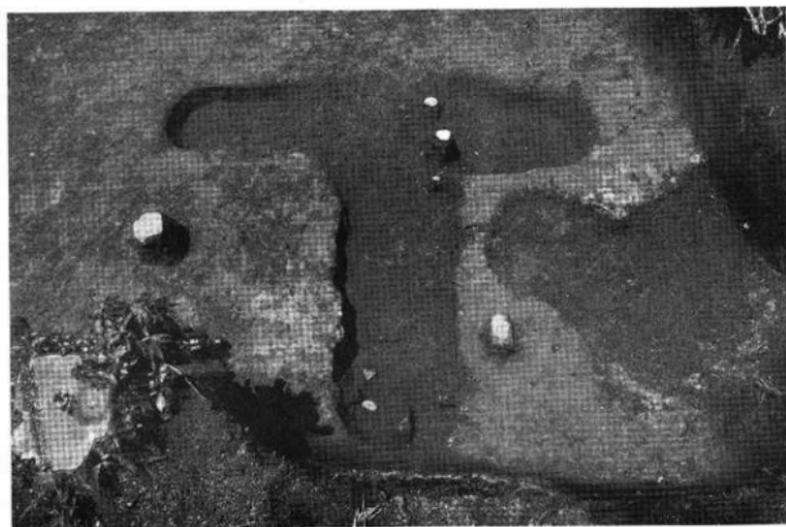
北側調査区遺物出土状況（南から）



旧石器時代遺物出土状況

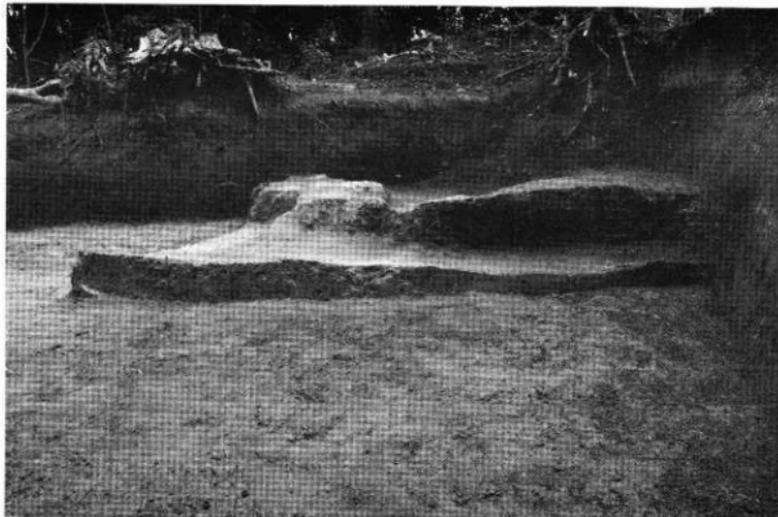


北側調査区縄文時代早期遺物状況（北から）

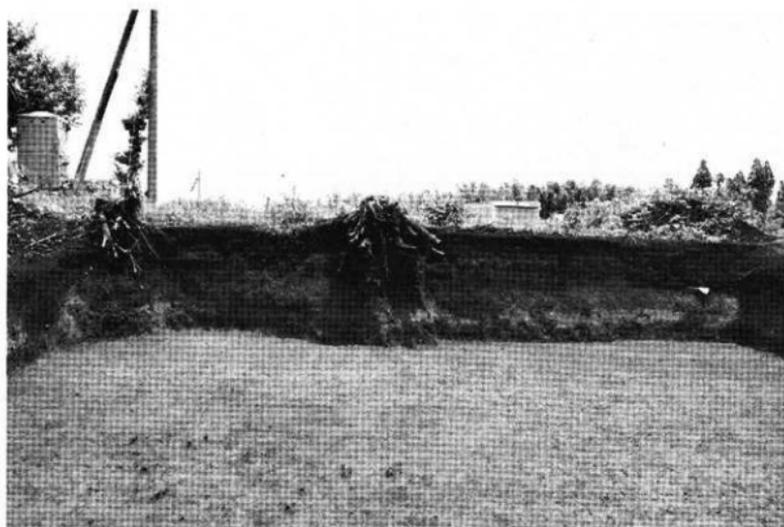


北側調査区連穴土壌検出状況

図 版



連穴土壇半載状況



北側調査区完掘状況

图版



1 南侧调查区·石核(残核)



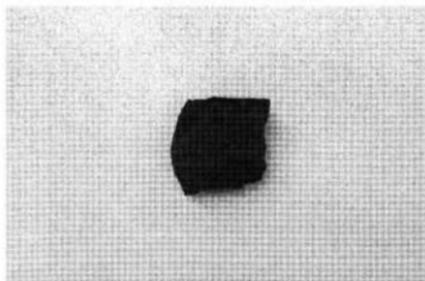
同裏面



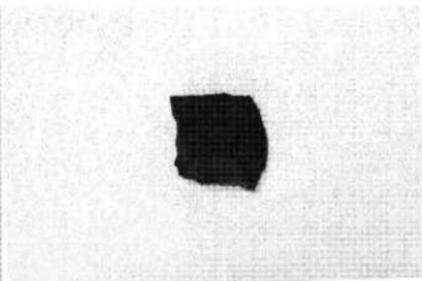
2 北侧调查区·剥片



同裏面



3 北侧调查区·折断剥片



同裏面



4 北侧调查区·基部加工



同裏面

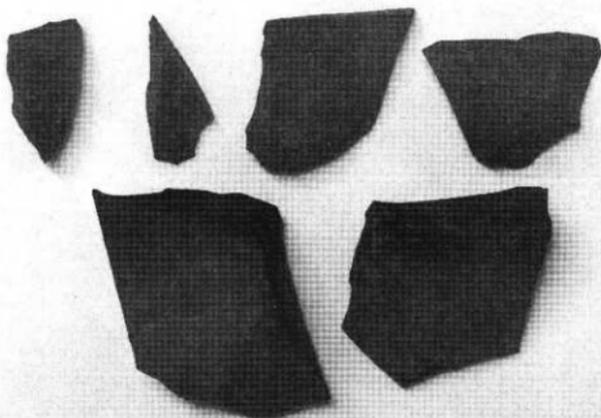
図 版



5 北側調査区・石核（残核）



同裏面



6 北側調査区・旧石器時代剥片類



7 敲石



同使用面

※遺物 1～5・8は同倍率。6の集合写真・7・9は倍率が異なる。

図版



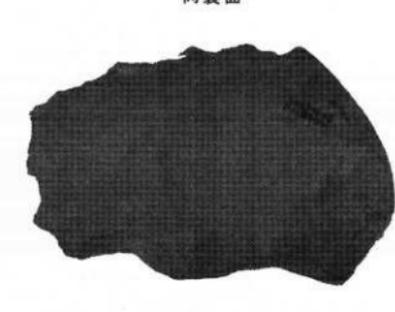
8 連穴土坑内鋸齒縁石器A



同裏面



9 連穴土坑内鋸齒縁石器B



同裏面



平成19年6月8日 作業風景

報 告 書 抄 録

ふりがな	かみのだばる			
書 名	平成18年度 県営農地保全事業上野田原地区H工区 発掘調査報告書			
副 書 名	野田原（のだばる）遺跡			
巻 次				
シリーズ名	川南町文化財調査報告書			
シリーズ番号	9			
編著者名	川南町教育委員会 文化振興室 係長 島岡 武			
編集機関	川南町教育委員会			
所在地	宮崎県児湯郡川南町大字平田2386-3			
発行年月日	平成20年3月31日			
所収遺跡	所 在 地	市町村コード	遺跡番 号	調査地の位置
野田原遺跡 Nodabaru	宮崎県児湯郡川南町 大字川南14,721地内	45-405		北緯 32° 12' 03" 東経 131° 29' 54"
	調 査 期 間	調査面積	調査原因	調査後の措置
	070424～070618	165㎡	県営農道整備	工事施工
主な遺構	連穴土壇 2基		主な遺物	縄文時代鋸齒縁石器 旧石器時代剥片類

平成18年度
県営農地保全事業上野田原地区
H工区農道整備に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成20年3月31日

編集発行 宮崎県児湯郡川南町教育委員会

宮崎県児湯郡川南町大字平田2386-3

印刷 : 有限会社横内印刷

